

「神に呼ばれることになる名前」

～その名前が身に合う日を目指して生きる～

ヨハネによる福音書 1 章 35～42 節 讃美歌 80、361

35 その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36 そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。37 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38 イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、39 イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らについて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。40 ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。41 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。42 そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

創世記 17 章 1～8 節

1 アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。2 わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」3 アブラムはひれ伏した。神は更に、語りかけて言われた。4 「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。5 あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。6 わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。7 わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。8 わたしは、あなたが滞在しているこのカナンすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」

■ 本論

洗礼者ヨハネの弟子でありました二人の人物が、ヨハネの「見よ、神の小羊だ」という声を聞きまして、その声に促されるかたちで、イエス様について行く。

そこで、イエス様こそが聖霊が降った、神様と結び合わされたメシア、救い主であるということを見た。前回はここまでを学びました。39 節までのところですよ。

そこには、二人の弟子がヨハネから「聞く」ということ。

その聞いたことをもとに、イエス様に「言う・尋ねる」ということ。

それから、イエス様に「ついて行く」。そして、救い主を「見る」ということ。

そのような、信仰がいかんにして生まれるのかという、ある流れが記されています。

それは、聞き、尋ね、従い、そして、神を見る・出会う、ということであると。

それでは、その動き始めた信仰が、どこに落ち着いてゆくのか。

それが今日のお話となります。

40 節にこうあります。ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。

ここでようやく二人の弟子の内の一人の名前が明らかにされます。

それは、**シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。**

しかし、皆さんはどうでしょうか。自分の名前が紹介される時に、「この方は〇〇さんです」と言われるのではなくて、「この方は〇〇さんの兄弟です」と言われるのは、あんまり良い気分がしないような気がします。

ちなみに、もう一人の弟子の名前は結局、明らかにされないままです。

古くから言われることは、この福音書を書いた人ではなかったか、ということです。が、自分の名前をここに書くことは申し訳ないということで控えた、ということ。

そうであるならば、二人の弟子は何とも慎み深い人であったと言えます。表に立つというよりは、後ろに控える、縁の下の力持ちという人物であったと言えます。

とりわけ、アンデレはそういう人物として、福音書に描かれています。

あんまりたくさん出てくるわけではありません。けれども、ある特徴が見えます。

ヨハネによる福音書に、アンデレが主にてでくる場面はあと 2 回だけです。

この次にてでくるのは、6 章です。「五千人給食」のお話のところでは、

イエス様のところにたくさんの群衆が集まって来る。

その群衆を見て、イエス様の弟子フィリポは心配になります。

食べものはどうでしょうか。

みんなが食べられるだけのパンをどこで買えばよいだろうか。

その時に、アンデレが言うんです。こんなにたくさんの人の分は無理でも、自分はパン五つと魚二匹とを持っている少年を知っていると。

それで、その少年をイエス様のところに連れて行くんです。

そこから、ご承知のあの美しい光景があらわされます。

パン五つと魚二匹から、みんながお腹いっぱいになるという出来事です。

そこにアンデレがでてくる。アンデレがしたことは、パンと魚を持った少年を、イエス様のところに連れて行く、ということでした。

もう一度、出てきますのが 12 章 20 節からのお話です。

イエス様一行がエルサレムにおられたときに、方々からたくさんの巡礼者が神殿にやってくる。その中には異邦人、外国人であるギリシア人も混じっていました。

その人たちが、またまたフィリポに言うんです。「イエス様にお会いしたい」と。

しかし、相手は異邦人ですから、フィリポもためらいまして、アンデレに相談するんですね。そうすると、アンデレは懐の深い人だったんでしょうね。イエス様のところに、こういう人たちが来ていますと、やっぱり連れて行くんです。

そうして、イエス様の「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」(12 章 32 節) という慰め深い言葉が語られることになります。

このように、アンデレは自分が何かをするというよりも、誰かをイエス様のところに連れて行くという役割をいつも果たすことになる人です。

決して目立つかたちではない。自分の名前を残そうという人ではありません。

けれども、それが少年であれ、それがギリシア人という異邦人であれ、とにかくイエス様のところに連れて行く、福音のもとに連れて行く。そうすれば大丈夫なんだと信じた人物でした。不思議と、イエス様の弟子の中で目立つタイプではありません。ですから、あまり名前が出てこない。

けれども、おそらく、やがてイエス様の弟子たちが増えてくるなかで、あれ、あなたはどうしてイエス様の弟子になったんですかと聞くと、いや実はアンデレさんに連れてこられまして、なんていう人がたくさんいたんだと思います。

ローマの信徒への手紙 10 章 11 節からにこういう言葉があります。

11 聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。**12** ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。**13** 「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

これはパウロの言葉ですけれども、アンデレほど、この言葉を地で行った人はいないのではないかと思います。「主を信じる者は、だれも失望することがない」、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のだと、それで、とにかく誰でもイエス様のところに連れて行った、それがアンデレという人でした。

そのアンデレが、実はイエス様の最初の弟子であったわけです。

ペトロは大きな顔をしていますけれども、彼は最初の弟子ではないんです。

ペトロがイエス様の弟子となるためには、あるいは、他の弟子が導かれていくためには、このアンデレの働きがなければ、それはありえなかったことです。

今日のところ、41 節にこう記されていました。

彼は、まず自分の兄弟シモンに会って

「まず」と記されています。

「まず」いうことは、その後、同じことがあったからです。

他の弟子となる人たちに対しても、自分の兄弟シモンに対しても。

今日は、その最初のお話です。

アンデレは、まず自分の兄弟シモンに会いに行きました。

イエス様のところに連れて行くためです。

聖書をよくお読みの方は、あれ！？と思われるかもしれません。

ペトロがイエス様の弟子になる、というのは、他の福音書が記すところによりますと、漁師でありましたペトロが漁をしている時に、イエス様が突然にやって来られまして、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と、こう言われまして、ペトロはついて行く。そうして、イエス様の弟子になったということです。

それは、実際に、ペトロの経験として、原体験としてはそうなんでしょう。

が、それがイエス様とペトロとの最初の出会いではない。

その前に、ペトロの兄弟アンデレの涙ぐましい伝道の努力があったということ、アンデレはまずペトロに会い、その後、何度も会い続けたと、ヨハネによる福音書は記すのです。

今も、人がイエス様に会おう、というのは、そういうものかもしれません。

もちろん、一回、教会に足を踏み入れる。それで信じられるという人もいるかもしれませんが、けれども、そうではなくて、何度も何度もという周囲の祈りが重ねられていく、そういうことがあるんでしょう。

アンデレは、へこたれない人でした。お兄ちゃんのペトロのところにも何度も通って、言うんです。「メシアに出会ったんだ」と。お兄ちゃん、ついに見つけたんだと。

ヨハネ先生の言う通りに、イエスという人について行ったら、その人がメシアだと分かったんだと、ついに見つけ出したよ、と。

だから、来てと。42節、**シモンをイエスのところに連れて行った。**

ペトロが自分で動かないから、連れて行った。

アンデレ自身は、洗礼者ヨハネの言葉を聞いて、素直にイエス様について行ったんです。それに対して、シモン・ペトロは、強情と言いますか、頑固と言いますか、よし、それならばと自分からイエス様のところに会いに行くということはしないんです。

それは無理ありません。

これは、他の福音書から知らされることですが、ペトロはもうこの時点で結婚しています。奥さんの家でしゅうとめさんと一緒に住んでいます。

その家庭を守らなきゃいけないんです。

漁師という仕事をして、家族を養っていかないといけない。

それが、どこの馬の骨とも分からない、メシアのところに行く。

そんな暇じゃないという思いが、ペトロには当然、あったでしょう。

どっぷり実社会の中に生きているわけです。

もちろん小さい頃から聖書を読んで、ユダヤ人としての生活はしている。

が、敬虔深いですとか、信仰的に鋭い感覚を持つ人であるとか、ペトロはそういうタイプの人ではない。少なくとも、イエス様と出会うまではなかった。

そんなペトロですから、自分から進んでイエス様のところに会いに行くことはない。それは、当然の反応です。

当然の反応ですが、それだけに一層のこと、そういうペトロを、とにもかくにもイエス様のところに連れて行ったアンデレは大したものです。

どれだけ時間をかけたんだろうと思います。

どれだけ心を注いだんだろうと思います。

今日は、まず、この姿を私たちの胸に刻みたい。

アンデレにあるのは、「**主を信じる者は、だれも失望することがない**」、「**主の名を呼び求める者はだれでも救われる**」という思いだけです。その思いだけで、お兄ちゃんをイエス様のところに連れて行ったんです。そうして、あとは、イエス様、お願いとお任せした。この姿を私たちの胸に刻みたい。

私たちも、こういう人の導きによって、祈りによって、イエス様に出会ったというところがあるんじゃないでしょうか。次は、私たちの番であるとも言えるでしょう。

そのことと、今日はもう一つのことを胸に刻みたい。

アンデレに連れてこられたシモン・ペトロを、イエス様はじっと見つめられた。

この「見つめる(εμβλέπω)」という言葉は、遠くまで見通すという意味の言葉です。

で、言われるんです。「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」。

この時が、おそらく初対面なんですね。初対面でこんなことを言いますかね。

このあたりに、イエス様のユニークさがあります。

急に、ニックネームというか名前をつけるんです。ケファと呼ぶことにすると。

「呼ぶことにする」ということは、これが最後じゃない、これからも関係を続けていくということです。出会い続けるということです。

ペトロはどう思ったのでしょうか。その反応は何も記されていません。

この次にペトロがでできますのは、もう 6 章 68 節になりまして、そこで、ペトロは、イエス様に対して「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」という信仰を告白する人になっている。その間に、他の福音書が記すように、「あなたを人間にとる漁師にしよう」という出来事などがあったんでしょう。

それでも、この時に、「ケファと呼ぶことにする」とイエス様に言われて、即座に反応のすることのないペトロのない姿は覚えておいて良いものです。

人は確かに神様に変えられる存在です。

しかし、それがすぐに、この瞬間にというわけでは必ずしもない。

人それぞれの時の歩み方があって、イエス様の言葉を受け止める速度があって、そうした一切のことを含めた神の時があります。

ペトロにして、そうであったということを知りたい。

本当に、いろいろな信仰のかたちがあるんですね。

アンデレのように、聞き、尋ね、従い、そして、イエス様に会ったならば、もうすぐにお兄ちゃんを連れてくる。そういう人もいれば、ゆっくりと、しかし確かな、失敗しながらでも確かな歩みを成すペトロのような人がいる。

イエス様は、その人たちすべてをご自分の弟子として引き受けられます。

そして、見通しておられます。弟子の今と、共に未来を見通しておられます。

イエス様は、シモンに、「ケファ」という名前を付けられる。

それが「岩」という意味であると。

「ケファ」というのはヘブライ語・アラム語で、「岩」を意味する言葉です。

それを、ギリシア語に翻訳すると「ペトロ」となります。

シモンよ、あなたは岩だ、と言われる。岩と呼ぶ、と言われる。

漁師でしたから、岩のような筋骨隆々の身体をしていたんでしょうか。

あるいは、武骨な、とっつきにくい、ゴツゴツとした性格をしていたんでしょうか。

けれども、イエス様の真意は、おそらくそういうところにはなかったでしょう。

「岩」というのは、聖書で大切に使われる言葉です。

今日の招きの言葉でお読みした詩編 62 編にも、こういう言葉が言われていました。

神は、わたしの岩、わたしの救い、岩の塔、わたしは動揺しない。

聖書はしばしば、「岩」という言葉をもって、神様をあらわします。

何があっても揺るがない人生の土台、あるいは身を隠す、守ってくれるお方。

そういう神様を讃える言葉として、聖書は「岩」という言葉を用います。

ということは、イエス様は、ペトロに対して、あなたを「神」と呼ぶことにすると
言ったこととなります。あなたは「神だ」と。あなたは神のように生きると。

それは、反応できないでしょう。それは、ペトロも悩むでしょう。

とんでもない名前を与えられているわけです。

そして、その意味を、ペトロは生涯かけて、イエス様に一緒に学んでいくことにな
ります。イエス様が言われる「神」とはどういう存在であるのか。イエス様は御自身
の姿をいつもペトロの前に置いて、教えていかれます。

それは十字架に向かう神なんです。低く、どんな人間よりも低くくださる神なんです。

自分の幸せを犠牲にして、人間に幸いをもたらす神なんです。輝かしい栄光の中に
ではない、土に押し付けられるようにして貧しい人と共にある神なんです。

そして、倒れても、倒されても、神の御力によって立ち上がる神なんです。

そんな神のように生きなさい。その神への信仰をあなたのものにしなさい。

それが、イエス様の思いであられはずです。

もちろん、この時点で、ペトロは、そういうようにイエス様があらわされる神のお
姿を知りません。彼もまた天高く栄光に包まれる神のお姿を考えていた。ですから、
そのギャップに苦しむことになる。つまづくことにもなる。

けれどもまた、神の御力によって立ち上がらせられることになる。

そういうペトロの姿を、イエス様は見通しておられる。

今の姿だけではないんです。今の言葉だけではない。

その人がどのように生きるのか、どのように生きなければいけないのか。

イエス様は見通しておられます。

その眼差しを、「**ケファと呼ぶことにする**」という言葉においてあらわされました。

もう逃げられません。神の眼差しの中に置かれた者は、もうその外に逃げることは
できません。どれだけ時間がかかろうが、どれだけ抵抗しようが、イエス様と共に、
イエス様が味あわれた低さを経験する、そのような幸いへと導かれていきます。

ここに集められた一人ひとりにも、その人なりのイエス様の召しがあります。

大切にしたいと思います。それは、わたしだけに与えられた神様の召しなのです。

他の人が肩代わりすることはできません。与えられた役割に誠実でありましょう。

そこに、神様の祝福があります。

お祈りいたしましょう。

■ 祈り

聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。12
ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び
求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。13「主の名を呼び求める者はだ
れでも救われる」のです。

■ 静止の時

『子どもと親のカテキズム』

問 3 5 聖霊(せいれい)なる神(かみ)さまは、どのようにして私(わたし)たちに救(すく)いを与(あた)えてくださるのですか。

答 聖霊(せいれい)なる神(かみ)さまは、私(わたし)たちのうちに働(はたら)いて、罪人(つみびと)と認(みと)めさせ、悔(く)い改(あらた)めて、イエスさまを信(しん)じるようにしてくださいます。その信仰(しんこう)を通(とお)して、私(わたし)たちを主(しゅ)イエス・キリストに結(むす)び合(あ)わせて救(すく)いを与(あた)えてくださいます。

先週、聖霊は、イエス様と私たちとを接着剤のように結び合わせてくれるお方であると学びました。今日、教えられていることは、私たちがイエス様と結び合わされるときに、何が起こるのか、ということです。

それは、第一に、私たちが罪人であると認めることができるということです。神のみ前に罪人であると。自分は神のみ前に立ちえない、神が求めるようには立派に生きられない存在であると認めることができる。そこに聖霊のお働きがあるということです。聖書にはたくさん、このように生きなさい、このように愛し合いなさいという教えが記されています。自分は、そのようには生きられない罪人であると認めるということです。

第二に、そのことを悔い改めるとということです。これもまた難しいことです。神様にゆるしをこうということです。罪を認めることも難しい。そのことを謝るということはもっと難しいことです。人間はそんなことをしないんです。ごまかすんです。けれども、もしそのことができるとするならば、そこには聖霊のお働きがあります。

第三に、イエス様を信じるようにしてくださる。私たちは罪人なんです。神様に赦されなければいけない存在なんです。だからこそ、イエス様の十字架に赦されるべき存在です。イエス様の十字架にのみ、自分の救いはあると信じることができる。

もし、わずかでも信じることができるならば、そう信じたいと願うならば、そこに聖霊のお働きがあります。

イエス様を信じるということは、私たちの努力やがんばりを越えたことです。

神が私たちに働きかけてくださっていることです。

ですから、信仰は人間が用いられながらも、しかし徹底して神の言葉なのです。

ですから、一度、その信仰が芽生えたならば、その信仰は失われることがあります。

人間の中で起こることですから、波はあります。しかし、失われることはありません。

信仰は、神がつくりだしたものだから。このことを覚えたいと思います。